

関係代名詞の研究

文学研究科英文学専攻博士後期課程3年

三ツ石直人

1 はじめに

関係代名詞の種類には、who, which, that, as, than, but, what, whoever, whichever, whateverがある。そのうち、名詞を修飾する節（形容詞節）を形成するものは、who, which, that, as, than, butである。さらに相関語句を必要とするなど特殊な使い方をするas, than, butを除けば、最も基本的な関係代名詞はwho, which, thatということになる。本稿では、この3つの関係代名詞に絞って研究を進める。

関係代名詞を使った文は、2つの文を1つにしたものに相当する。たとえば(1)の文は、(2a)と(2b)のように、2つの文に分けて書き換えることができる。

(1) He was an Austrian who came to this country a young boy. (W. Cather, *My Ántonia*)

(彼はこの土地に来たときにはまだ若い少年のオーストリア人だった)

(2a) He was an Austrian.

(2b) He came to this country a young boy.

(2a)のan Austrianと(2b)のheが同一人物である。このheをwhoに書き換えてan Austrianの直後につなげると、(1)の文が完成する。このような文のつくりを見ると、whoの中には人称代名詞のheが含まれていることがわかる。さらにwhoは、名詞を修飾する形容詞節をも形成しているので接続詞でもある。つまりwhoは、節の内側では代名詞の役割を果たし、節の外側では接続詞の役割を果たしている。この関係代名詞の本質である代名詞的性質と接続詞的性質を明らかにするのが本稿の目的である。

2 関係代名詞の性質

ここでは関係代名詞の2つの品詞性、代名詞的性質と接続詞的性質について考察する。

2.1 関係代名詞の代名詞的性質

関係代名詞に人称代名詞が内在されていることは、上記の(1)で示した通りである。Whoには人を表す人称代名詞が内在されているが、一方で、関係代名詞のwhichは人以外のものを先行詞とする。そのため、whichの中にはheやsheなど人を表す人称代名詞ではなく、itが含まれているということになる。

(3) He wrote a book *which* he called “The Book of the Grotesque.”

(S. Anderson, *Winesburg, Ohio*)

(彼は『グロテスクな者たちに関する本』と題した本を書いた)

(4a) He wrote a book.

(4b) He called it “The Book of the Grotesque.”

このように、(1)から(2a, b)への、(3)から(4a, b)への書き換えが成立するのであれば、以下の表が認められることになる。

表1：

	主格	所有格	目的格
関係代名詞	who	whose	whom
人称代名詞	he	his	him

表2：

	主格	所有格	目的格
関係代名詞	which	whose	which
人称代名詞	it	its	it

Whoやwhichには人称代名詞の要素が含まれているが、thatの場合はどうだろうか。Thatは、次の例のように、先行詞に人も人以外のものも取れる。

(5) You're *the very same person that* used to lecture me on Sunday mornings.

(J. Joyce, *Dubliners*)

(あなたは、昔日曜日の朝ごとに、私に説教してくれたまさにその人だ)

(6) They drove westward toward *a big white house that* stood on a hill.

(W. Cather, *O, Pioneers!*)

(彼らは丘の上に立っている大きな白い家に向かって西へと馬車を走らせた)

これには、thatの本質である指示代名詞としての性質が関与している。指示代名詞のthatは、下記の辞書の定義にあるように、人も人以外のものも指示対象にできる。

COD¹¹ : used to identify a specific person or thing observed or heard by the speaker

LDOCE⁶ : used to refer to a person, thing, idea etc that has already been mentioned or is already known about

したがって、関係代名詞のthatには人称代名詞が内在されているというわけではなく、指示代名詞としての性質を残しながら、関係代名詞に転用されたのだと考えられる。

しかし、このthatは指示代名詞の性質を残しているものの、その性質はかなり失われているように感じる。その根拠は、数によって語形が変わらないというところにある。次の(7)のように、指示代名詞のthatは複数の場合にはthoseに変化する。しかし、関係代名詞の場合は、(8)のように複数であっても語形変化は起こらずにthatのままである。

(7) *Those words were constantly recurring to me.* (C. Dickens, *David Copperfield*)

(その言葉は絶えず、私の心に浮かんだ)

(8) The light fell upon *the two young faces that were* turned mutely toward it.

(W. Cather, *O, Pioneers!*)

(その光は、黙ってそれに向けられた2人の若者の顔に当たった)

仮に関係代名詞のthatの中に指示代名詞の性質がしっかりと残っているとすれば、(8)のthatはthoseになるはずである。したがって、関係代名詞のthatの品詞性は指示代名詞の性質を残しながらも、かなり接続詞に片寄っていると言える。

2.2 関係代名詞の接続詞的性質

はじめに述べたように、関係代名詞は形容詞節を形成する接続詞的な役割も果たしている。これまでに挙げた例を見ると、関係代名詞によって導かれた形容詞節は、名詞を修飾することでその名詞を限定している。一方で名詞を限定する以外に、関係代名詞には先行詞に補足説明を加える用法もある。このような用法を、名詞を限定する用法(制限用法)に対し、非制限用法と言う。

(9) She spoke to me of Emily, *whom* she had visited.

(C. Dickens, *David Copperfield*)

(彼女は私にエミリーについて話してくれたが、その人のもとに、彼女は訪れたことがあった)

非制限用法の文法的特徴は、上記の例のように、先行詞と関係代名詞の間にコンマが置かれるところである。コンマの代わりにコロン (10)、セミコロン (11)、ピリオド (12)、カッコ (13)、ダッシュ (14) が使われることもある。

(10) I hugged Joe round the neck: *who* dropped the poker to hug me.

(C. Dickens, *Great Expectations*)

(私はジョーの首に抱きついた。彼も火かき棒を落として私を抱きしめた)

(11) Mrs. Welland confided the case to Newland Archer; *who*, aflame at the outrage, appealed passionately and authoritatively to his mother.

(E. Wharton, *The age of Innocence*)

(ウェランド夫人はその事実をニューランド・アーチャーに打ち明けた。その途端、彼は怒りのあまり顔を真っ赤にして、感情的に、そして高圧的に母親に訴えかけた)

(12) He was called “Jim” and hugged by Mrs. James Dillingham Young. *Which* is all very good.

(O. Henry, *The Gift of the Magi*)

(彼はジェイムス・ディリングナム・ヤング夫人に、「ジム」と呼ばれてぎゅっと抱きしめられた。これは本当にとっても良いことである)

(13) I hardly saw Mrs. Creakle or Miss Creakle (*who* were both there, in the parlour).

(C. Dickens, *David Copperfield*)

(クリークル夫人もそのお嬢さんもほとんど見えなかった (二人とも同じ居間にいたのだけれど))

(14) With those words, he released me —*which* I was glad of.

(C. Dickens, *Great Expectations*)

(そう言うと、彼は私を解放してくれた—そうしてくれて、私は嬉しかった)

非制限用法は、山岡 (2014 : 385) や吉川 (1956 : 189) で述べられているように、andやbutによって導かれる等位節やbecauseやthoughなどによって導かれる副詞節となる。ここから、非制限用法で使用できるwhoやwhichは、ただ名詞を限定するだけでなく、何かしらの等位接続詞や副詞節を導く従属接続詞の意味をも含んでいると言える。その一方で、後で詳しく述べるが、thatは原則的に非制限用法では使用できない。したがって、埋橋 (1995: 94) の言うように、thatの役割は専ら名詞を限定することであり、先に挙げたand, but, though, becauseなどのような意味はthatに含まれてはいない。

3 whoについて

3.1 whoの格変化

Whoの語源は関係代名詞ではなく、疑問代名詞である。疑問代名詞のwhoは主格、所有格、目的格と格変化する。関係代名詞のwhoも格変化するが、疑問代名詞とまったく同じように変化する。

表3：

	主格	所有格	目的格
疑問代名詞	who	whose	whom
関係代名詞	who	whose	whom

ただし、関係代名詞の目的格であるwhomは、次の例のようにwhoになることもある。

(15a) I know the man *whom* you mentioned. (安藤 (2005 : 183))

(15b) I know the man *who* you mentioned. (安藤 (2005 : 183))

(君が言っていた人を僕は知っています)

このような例は疑問代名詞でも存在する。次の例では、前置詞withの目的語がwhoである。もし目的語ならば目的格にすべきところだが、主格が使われている。

(16) *Who* were you with at the theater? (T. Dreiser, *Sister Carrie*)

(その劇場であなたは誰と一緒に居たの?)

(15b) のように目的格を使用すべきところに主格を使用する例は、疑問代名詞の影響を受けているのだと考えられる。

また、連鎖関係代名詞では、(15a, b) とは反対に、whoを使用すべきところにwhomを使用する例がある。次の(17a) では主格の関係代名詞であるwhoが使用され、(17b) では目的格の関係代名詞であるwhomが使用されている。一般には、(17a) のように関係代名詞がthinkに続く従属節内の主語にあたるので、whoを使用する。一方で(17b) は、関係代名詞の直後に主語と動詞があることから、その動詞の目的語と誤解され、その結果としてwhomが使用されたのだと思われる。

(17a) We feed children *who* we think are hungry. (Jespersen (1961 : 197))

(17b) We feed children *whom* we think are hungry. (Jespersen (1961 : 197))

(僕たちはお腹が空いていると思う子供たちに食べ物をあげます)

Jespersen (1961) は (17b) のような例を正用法とは認めてはいないが、英語母語話者、非母語話者に拘わらず、このような文が使用されることは認めている。

3.2 whoの先行詞

Whoの先行詞は一般に人であると言われている。次の例では先行詞がactressなので、関係代名詞はwhoが使われている。

(18) *The actress* who played Marguerite was even then old-fashioned.

(W. Cather, *My Ántonia*)

(マルグリットを演じた女優は、その時ですら、古風な演技方をしていた)

その一方で、次の (19-27) のように、先行詞が人以外でもwhoが使用されることがある。

(19) *The bird*, who had only been stunned, recovering himself gave me so many boxes with his wings. (J. Swift, *Gulliver's Travels*)

(その鳥は、ただ気絶していただけで、すぐに意識を取り戻すと、私を翼で何発も殴った)

(20) *The cat*, who had been a puzzled observer of these unusual movements, jumped up into Zeena's chair. (E. Wharton, *Ethan Frome*)

(その猫は、これらの異常な行動を困惑しながらじっと見ていたが、ジーナの椅子にぴょんと飛び乗った)

(21) I encountered *her little dog*, who was called Jip. (C. Dickens, *David Copperfield*)

(彼女が飼っているジップという名の小さな犬に偶然出くわした)

(22) She was walking by *the White Rabbit*, who was peeping anxiously into her face.

(L. Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*)

(彼女は、熱心に彼女の顔を覗き込んでいた白ウサギのそばを歩いて通り過ぎようとしていた)

(23) Could *the demon* who had murdered my brother in his hellish sport have betrayed the innocent to death and ignominy? (M. Shelley, *Frankenstein*)

(悪魔のような気晴らしで私の弟を殺した鬼人は、今度は罪のない人たちに死と屈辱を与えてしまうのだろうか)

(24) About one-third of them are thought to have a '*good fairy*' who give up to £100 a month. (R. Thurlow, *Fascism in Britain*)

(彼らの3分の1には月に100ポンドまでくれる妖精がいると思われている)

- (25) Sarah Pocket conducted me down as if I were *a ghost* who must be seen out.

(C. Dickens, *Great Expectations*)

(サラ・ポケットは、まるで私が外へ行くのを見送らなければならない幽霊であるかのように、私を下の階へ連れて行ってくれた)

- (26) Philip remembered how he had prayed to *a God* who was able to remove mountains for him who had faith.

(S. Maugham, *Of Human Bondage*)

(フィリップは、信仰心のある者に対しては山をも動かすことのできる神様に、たくさん祈りを捧げていたことを思い出した)

- (27) Fairy tales about *sprites* who enchant handsome princes and beautiful maidens

(ランダムハウス英和辞典)

(かっこいい王子様や綺麗な乙女に魔法をかける妖精についてのおとぎ話)

(19-22)の先行詞は動物である。通常、動物はitで受けるため、人とはみなされていない。そのため、関係代名詞でもwhichが使用されるのが普通である。しかし、これらの例で出てきた動物は、人間にとって家族とも言えるほど身近な動物であったり、人のように行動したり、話したり、知覚したりすることができる動物である。そのため、人と同じように考えられ、関係代名詞にはwhoが選択されたのだと思われる。また、(23-27)は悪魔や神、妖精などといったこの世には存在しないものなので、これらは人とは言えない。しかし、絵や映像などによって具現化された時に人の形をしていることが多い。さらに、(19-22)の動物と同じように、話したり、知覚したりできる。このようなことから、人ではないが人に近い存在としてみなされた結果、関係代名詞はwhichではなく、whoが選択されるのだと考えられる。

4 whichについて

4.1 whichの格変化

Whichは、関係代名詞では主格、所有格、目的格の3つの格を持っている。しかし、疑問代名詞のwhichには格変化がない。強いて言えば、主格と目的格は同じ形であり、所有格がない。

表4：

	主格	所有格	目的格
疑問代名詞	which	φ	which
関係代名詞	which	whose	which

これは関係代名詞のwhoとは違った特徴である。Whoは3章で述べたように、疑問代名詞と関係代名詞の格変化が一致している。すなわち、疑問代名詞から関係代名詞へとそのまま転用されているのである。一方でwhichは疑問代名詞から関係代名詞に転用する際、所有格にwhoseを追加している。このwhoseは、疑問代名詞から関係代名詞に転用する際に所有格がなかったため、同じwh-語のwhoの所有格から借用されたものである。それ故、関係代名詞のwhichの中にはitが含まれていてもおかしくはないが、whoseの中にはitsが含まれているように感じられない。

これまでのwhoとwhichの格変化の考察結果から、whoとwhichの関係代名詞の代名詞的性質は全く同じではなく、疑問代名詞から関係代名詞にそのまま転用されたwhoの方が、代名詞的性質が強いように思える。なぜなら、whichには人称代名詞のitsに相当するものが実質ないからである。

また、次の例のように、先行詞が人以外のものの時、whoseの代わりにof whichという形も使用される。

- (28) He mentioned a book the title *of which* I can't remember. (安藤 (2005 : 185))
(彼は、私が題名を思い出せない本について話した)

これは目的格の関係代名詞whichの直前に、所有を表すofを置いたものである。たしかにこれは、所有格に相当するものではあるが、これは所有格と呼べるようなものではなく、文法規則に従ってつくられたものである。Leech & Svartvik (2002 : 386) では、whoseとof whichに関して、先行詞が人でない場合はof whichを使用することで、whoseを避けるのが普通であるとしている。このように先行詞が人でないときにwhoseが避けられるのは、やはり、whoseが人を表す関係代名詞という意識があるからである。

4.2 whichの先行詞

次の例のようにwhichの先行詞は、whoが人であるのに対し、人以外のものである。

- (29) There were *two pockets which* we could not enter. (J, Swift, *Gulliver's Travel*)
(私たちが入れないポケットが2つあった)

この関係代名詞もまた、whoの時と同様に例外があり、人と思われるものに対してwhichが使用されることがある。

- (30) She is *the ideal homemaker* which his former wife is not. (江川 (1991 : 75))
 (彼女は、前妻とは異なる理想的な主婦だった)
- (31) The founders of the greater part of *the families* which now composed the aristocracy of Salem might here be traced (N. Hawthorne, *The Scarlet Letter*)
 (セイレムの貴族階級を現在、構成している一族の大部分を築き上げた者たちの跡を、ここで辿れるかもしれない)
- (32) The Inner City and the districts north of the Danube Canal swarmed with *a people* which even outwardly had lost all resemblance to Germans. (J. Fest, *Hitler*)
 (インナーシティとドナウ運川の北にある地区は、外見さえドイツ人と似たところをすべて失った国民でいっぱいになった)
- (33) I'm the future mother of *a child* which is not yours. (L. Borodin, *Partings*)
 (私は、あなたの子ではない子供の、未来の母親よ)

(30) では先行詞がhomemakerなので、関係代名詞はwhoが使用されるところだが、実際にはwhichが使用されている。先行詞のhomemakerは主格補語で、主語がどういう人間かという情報を補う要素である。つまり、homemakerは人自体を表すのではなく、その人の性格や性質、職業などを表している。そのため、人以外のものと認識されてwhoではなく、whichが使用されるのである。(31) と (32) もfamilyやpeopleが先行詞だが、関係代名詞はwhichが選ばれている。これらの先行詞は一見すると人を表しているように思えるが、どちらも集合名詞である。集合名詞は個々の人格のある人というよりも、人々が集まって出来上がったものとして考えられているため、whichが使用される。(33) ではchildが先行詞となっている。Childは人だが、次の例のように、人称代名詞のitで受ける時がある。

- (34) That child seems ill, doesn't *it*? (ジーニアス英和大辞典)
 (あの子供は病気のようにですね)

これは、babyをitで受けるのと同様に、まだちゃんとした人として認められてはいないからなのであろう。このように、childやbabyが先行詞の場合、関係代名詞にはwhichが使用されることがある。

関係代名詞のwhichが非制限用法で使用されている場合、名詞のみならず、句や節も先行詞になり得る。

- (35) We had to *sleep in our wet clothes*, which was uncomfortable. (江川 (1991 : 78))
 (私たちは濡れた服で眠らなければならなかったのだが、それは不快なことだった)

(36) *If he went out after dinner, which happened rarely, he was always back by ten.* (江川 (1991 : 78))

(夕食後に外出するなんてことはめったになかったが、もしあったとしても、彼はいつも10時までには戻ってきた)

これはwhichだけの用法であってwhoにはない。その要因となっているのは、やはり、関係代名詞に含まれている人称代名詞にある。Whoに含まれている人称代名詞はheやsheなどで、これらは人を受ける代名詞であり、それ以外のものは受けられない。一方でwhichの中に含まれているitは、人以外を表す名詞のみならず、句や節をも受けられる。

(37) *Don't let your boy play with a knife. It's dangerous.* (江川 (1991 : 47))

(子供にナイフで遊ぶのを許してはいけない。それは危険なことだ)

(38) *Don't mention that she's put on weight – she is very sensitive about it.* (江川 (1991 : 47))

(彼女に太ったなんて言うてはいけないよ。すごく気にしているんだから)

したがって、whichが句や節も先行詞として取り得るのは、内包されたitの力によるものである。

5 thatについて

5.1 thatの格変化

関係代名詞のthatは元々指示代名詞であるため、whichと同様に所有格がなく、主格と目的格が同じ形である。このように、関係代名詞になってもまったく形が変わらないという点は、2章で述べた指示代名詞の名残を感じさせる。

	主格	所有格	目的格
指示代名詞	that	ϕ	that
関係代名詞	that	ϕ	that

Whichとの違いは、関係代名詞になったときに所有格が追加されたかどうかである。Whichの場合、同じwh-語ということで、whoの所有格であるwhoseを借りることで所有格を補えたが、thatの場合はwh-語ではないため、whoseを所有格として補えない。それ故、thatは関係代名詞になっても指示代名詞の時と変化がない。このように考えると、thatとwhichはwhoseの有無の差だけで、関係代名詞に転用された時点での代名詞のレベルとしては、ほぼ

同じなのかもしれない。Thatとwhoとwhichの使われ方について、成田ら（1984）は、先行詞が人の場合はthatよりもwhoの方が好んで使われ、先行詞が人以外のもの場合は、文語ではwhich、口語ではthatが使われる傾向にあると述べている。文語とか口語とかに拘わらず先行詞が人の時の関係代名詞がはっきりしているのは、whoの格変化が漏れなく存在するため、そこにheやsheなどのような人を表す人称代名詞の存在が感じられるからである。しかし、先行詞が人以外の場合、whichの格変化には真の所有格と呼べるものが存在せず、本来あるべきitsを含む語を欠いている。それ故、whichはwhoほど人称代名詞の性質が強くない。そのため、先行詞が人以外の時はwhichが好んで使われるということがなく、文語ではwhich、口語ではthatと使い分けられるのだと考えられる。このようなことから、whichとthatの代名詞性という点ではほぼ同じなのではないかと思える。よって、who, which, thatの代名詞的性質の強さを図式化すると以下のようになる。

(39) that \leq which \leq who

5.2 thatの先行詞

Thatの先行詞は人でも人以外のものでも容認される。そのため、whoやwhichに比べると具体性に欠く。しかし、thatは先行詞が何であるかは問題ではなく、その役割はとかく名詞を限定することにある。この名詞を限定することに特化したthatが、好んで使用される環境がある。それは「唯一」を表す語句や「全」や「無」を意味する語句が先行詞を修飾している場合、または「全」や「無」を意味する語自体が先行詞の場合である。

(40) *The first and the simplest emotion* that we discover in the human mind is curiosity.

(人間の精神の中で我々が気付く一番初めで、一番単純な感情は好奇心である)

(41) A parrot is *the only animal* that can imitate human speech.

(オウムは唯一、人間の言葉を真似できる動物だ)

(42) This is *the very place* that I have long wanted to visit.

(これこそ、私が長いこと訪れたいと思っていた場所だ)

(43) Don't believe *all the gossip* that you hear.

(耳にする噂話のすべてを信じてはいけない)

(44) *Any paper* that you read will give the same story.

(どんな新聞を読んでも、同じ話が載っているだろう)

(45) *Everything* had been done that could be done in so short a time.

(そんな短時間で、できることはすべてやってしまった)

(46) *Nothing* that I do pleases her.

(僕が何をやっても彼女は気に入らない)

((40-46) までの例文は江川 (1991 : 80) より引用)

このように、序数や最上級、only, very, all, anyで修飾された名詞もeverythingやnothingも、範囲を強く限定する必要がある。どの範囲で唯一なのか、どの範囲ですべてなのか重要となってくるのである。その場合、限定することに長けたthatが好んで使用されるのも当然のことと言える。

5.3 thatが使用できないとき

Thatは、Quirk *et al.* (1985) やHuddleston & Pullum (2002) などで行われているように、非制限用法と直前に前置詞を伴う用法（以下、[前置詞+関係代名詞]）では使えない。

(47a) This excellent book, *which* has only just been reviewed, was published a year ago.

(この素晴らしい本は、たった今批評が書かれたのだが、1年前に出版されたものだ)

(47b) ? *This excellent book, *that* has only just been reviewed, was published a year ago.

(Quirk *et al.* (1985 : 1257))

(48a) the knife *with which* he cut it

(彼がそれを切るのに使ったナイフ)

(48b) *the knife *with that* he cut it (Huddleston & Pullum (2002 : 1057))

なぜ上記の場合にthatが使用できないかは定かではないが、この2つの例には共通点がある。それはどちらも、関係代名詞と先行詞が接触していないという点である。非制限用法では関係代名詞と先行詞の間にコンマなどのポーズがあり、[前置詞+関係代名詞]では関係代名詞と先行詞の間に前置詞がある。このような状況でthatが使用できないのだとすれば、thatはコンマや前置詞などといった、いわば壁のようなものを乗り越えられないのだと考えられる。では、なぜthatがこのような場合に使用できないのか。その原因は、thatの代名詞性にあると思われる。Thatの代名詞的性質については(39)で図式化した通り、whoやwhichに劣る。また、指示代名詞の力もほとんど残っていない。したがって、thatの代名詞性の弱さ故にこのような使用制限があるのだと言える。ただし、(47b)に疑問符が付いているように、thatが非制限用法で使われることがある。

(49) Annie played under the tall old hedge, picking up alder cones, that she called currants. (D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*)

(アニーは背の高い古い生垣の下で、彼女がフサスグリと呼んでいたハンノキの実を拾って遊んでいた)

(50) Near it tilted a shattered windmill frame, that had no wheel.

(W. Cather, *My Ántonia*)

(その近くで傾いていたのは壊れた風車小屋だったが、風車そのものはなかった)

Quirk *et al.* (1985) は、このようにthatが非制限用法で使われるのは稀としているが、実際にthatが使用された時の筆者の意識の中ではその指示代名詞性が考慮され、それが関係代名詞になってもまだ強く残っていると考えられた結果、このような現象が生じるのだろう。

6 おわりに

本稿では、関係代名詞のwho, which, thatの本質である代名詞的性質と接続詞的性質を中心に考察を行ってきた。そこでわかったことをまとめて本稿の締めくくりとする。

- ・ 関係代名詞は節の内側では代名詞の役割を果たし、節の外側では接続詞の役割を果たす。
- ・ whoにはheやsheが、whichにはitが内在されている。
- ・ thatは、人称代名詞が内在されているのではなく、指示代名詞の性質を残している。
- ・ thatは指示代名詞の性質を残しているが、その性質はかなり接続詞に片寄っている。
- ・ 非制限用法で使用できるwhoやwhichは、等位接続詞やbecauseやthoughなどの従属接続詞の意味を含んでいる。
- ・ thatは非制限用法で使用できないため、その役割は名詞を限定することにある。
- ・ whoの格変化は疑問代名詞の時と全く同じである。
- ・ 人格を認められたり、人と同じように行動できたりすればwhoの先行詞になり得る。
- ・ whichの格変化は疑問代名詞の時とは異なり、whoseが追加されている。
- ・ whichの所有格はwhoからの借用なので、その中にitsは含まれていない。そのため、of whichを使用することでwhoseを避ける傾向にある。
- ・ whichの先行詞はwhoとは反対に人格が認められないものがくる。
- ・ 非制限用法においてwhichは、内包されたitの力で、句や節を先行詞にできる。
- ・ thatは指示代名詞の時と同様、格変化を起さず、また所有格も存在しない。
- ・ thatとwhichは関係代名詞に転用された時点ではほぼ同じ代名詞レベルにある。
- ・ 先行詞が人の時はwhoが好まれ、ものの時は口語ではthat、文語ではwhichが好まれる。
- ・ who, which, thatの代名詞的性質の強さは、 $who < which \leq that$ となる。
- ・ 「全」や「無」を意味する語が先行詞の時にthatが好んで使用されるのは、これらの先行詞の範囲を限定する必要があるからである。

- ・ thatは非制限用法や〔前置詞＋関係代名詞〕、連鎖関係代名詞で使用できない。このように関係代名詞と先行詞の間に語句やポーズがある時に使用できないのは、thatの代名詞性の弱さが原因である。
- ・ thatが非制限用法で稀に使用されるのは、thatの指示代名詞性が考慮された結果である。

参考文献：

- 荒木一雄（1954）『英文法シリーズ 5. 関係詞』東京：研究社。
- 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』東京：開拓社。
- 埋橋勇三（1995）『英文法講話』東京：ライオン社。
- 江川泰一郎（1991）『英文法解説—改訂三版—』東京：金子書房。
- 成田義光, 丸谷満男, 島田守（1985）『講座・学校英文法の基礎6 前置詞・接続詞・関係詞』東京：研究社。
- 山岡洋（2014）『新英文法概説』東京：開拓社。
- 吉川美夫（1956）『英文法詳説』東京：文建書房。
- Huddleston, R and G. Pullum（2002）. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto（1961）. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. London: George Allen & Unwin.
- Leech, G. and J. Svartvik（2002）. *A Communicative Grammar of English 3rd ed.* Harlow: Pearson Education.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik（1985）. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

辞書類：

- 『ジーニアス英和大辞典』東京：大修館書店（2001）
- 『ランダムハウス英和大辞典 第2版』東京：小学館（1994）
- Concise Oxford English Dictionary 11th ed.*, Oxford: Oxford University Press 2004.
- Longman Dictionary of Contemporary English 6th ed.*, Harlow: Pearson Education 2014.

A Study of Relative Pronouns

MITSUISHI, Naoto

The aim of this thesis is to clarify the essence of the pronominal and conjunctive nature which relative pronouns *who*, *which* and *that* have and, based on it, to probe into irregular grammatical facts on them. Their irregular grammatical facts are that *that* cannot be used when commas, prepositions exist just before it, and it is preferred to *who* and *which* if its antecedents are modified by the words *only*, *the first*, *the very*, *all* and so on. In order to make the essence of the three relative pronouns clear, we investigate the word origins, declensions and antecedents of them from the viewpoint of school grammar. As a result of the investigation, it became evident that the pronominal nature which each of them has is different. The pronominal level of *who* and *which* seems to be equal, but the level of *which* is weaker than that of *who* because *which* does not have the possessive case which it can be said is genuine. In addition, the level of *that* is weaker than that of *which* because it lacks not only the possessive case but also the definiteness of the antecedents and declension by the agreement of number which a demonstrative pronoun *that* has. From these results of this research, it is concluded that *that* cannot cross commas and prepositions and modify the antecedents.